

## もっと知りたい!TCIボランティアセンター!略してボラセン!

### □献金報告

6月12日~14日のチャペル後に夏のボランティア活動の為に学内献金を募り、50,466円の献金が与えられました。10月14日に行われたシオン祭にて、これからのボランティア活動の為に献金を募り、28,660円の献金が与えられました。この献金は、夏休み期間に行われたサクラハウス子どもキャンプへ派遣するため、77,403円使われました。残額はこれからの被災地ボランティア派遣のために使わせていただきます。今後も変わり続ける被災地でのボランティア派遣を継続していくために、祈りと献金のサポートを宜しくお願い致します。

### □活動報告

#### \*サクラハウス子どもキャンプ

8月5日~9日に山形県の山形月山ボレボレファームにて、TCUの7名の学生(平井和基、堀裕貴、遠田ゆりな、石橋彬斗、吉澤愛祈、一重めぐみ)が子どもキャンプのボランティアスタッフとして参加しました。プールなど様々なプログラムを通して被災地の子どもたちと交わりました。以下はボランティアに参加した学生の感想です。

◆感想:神学専攻4年 平井和基さん  
ボランティアセンターのキャンプは今回で4回目の参加でした。初めて参加した時に、この子どもたちと継続して関わっていこうと決めたのを今でも覚えています。TCUにいると、様々なキャンプに参加する機会がありますが、一回きりのキャンプも少なくありません。その中で、継続して参加することに重要な意味があることに、東北ボランティアキャンプを通して教えられています。被災を経験した子どもたちと遊び共に過ごす時間は、僕に生きていく上で必要な意味を教えてください。お菓子を食べる時間に、自分の分をまず隣の子にあげる子どもたちの姿から、「共に生きる」ことを学びました。これからも、関わり続けられるかぎり、キャンプに参加したいと思っています。

◆感想:教会教職専攻3年 石橋彬斗さん  
サクラハウス夏の子供キャンプに、初めて参加しました。小学3年生の男の子8人と寝食を共にし、楽しい3日間を過ごしました。みんな元気で、喧嘩することもありましたが、すぐに仲直りして、別れ際には「また会おうね!」と言い合う姿を見ることが出来ました。私にも「また来てね!」と言ってきて、とても嬉しかったです。

参加者は、クリスチャンでない子がほとんどでしたが、食事前と寝る前に毎回お祈りの時を持ちました。驚いたことに、寝る前のお祈りの時に、「僕がお祈りたい!」と何人かの子が言ってくれました。また、「ちょっとお祈りしてくるね。」と言って屋根裏に行く子もいました。これから先、みんながイエス様と出会うよう導かれることを祈り願っています。一緒にお風呂に入ったこと、一緒にプールで泳いだこと、一緒に星を眺めたこと、一緒にお祈りしたこと、全部良い思い出となりました。また会って一緒に遊ぶのを楽しみにしています!

#### ◆感想:国際キリスト教学専攻4年 吉澤愛祈さん

YouTubeに東日本大震災の津波の映像がある。津波が家々を飲み込む映像と一緒に、そこに住んでいた人たちの声が残っている。「ああ、終わった」自分たちの家が飲み込まれていく様子を見ることしかできない人々。絶望の中、「早く、あがれ!」「早く!早く!」ついさっきまで、丘の上で津波を見物していた人たちが一斉にもっと高いところに向かって走り出す。キャンプで関わった人たちは、8年前にこの状況の中にいた人たち。特に、小学生のときにキャンパーとして参加していたスタッフもいる。彼らは私たちと年が近く、小学生のときにあの現場にいた。そんな彼らと一緒にキャンプを作り、笑い、素敵な4日間を過ごすことにすごく励まされた。キャンプを思い切り楽しむ原動力は誰よりも大きく、生きていく力強さを感じた。震災から8年たつて、震災のことが少しずつ忘れられてきている中で、前に進もうとしているエネルギーを感じるキャンプだった。



#### \*台風19号被災地ボランティア

10月14日~16日に福島県須賀川市にて、TCUの5名の学生(木田友子、小林悠、本間春奈、石橋彬斗、泉ユリエ)がボランティアに行きました。地域の教会や教会員の方のお宅で様々な作業をし、また交わりの時を持ちました。以下はボランティアに参加した学生の感想です。

◆感想:大学院 1年 小林悠さん  
台風19号が大雨とひどい被害を伴って東日本を縦断しました。河川の決壊、氾濫。いつもと違って茶色い泥水がごうごうと流れる川の様子をニュースで見て、どうなってしまうのだろうと思いながら台風の夜を過ごしました。ボランティアの日、午後に向かったお宅は川沿いで、川の氾濫によって1階が全部浸かり、翌日まで2階で救助を待たされたそうです。お家の方がもう住めない家を片付ける姿を見て、2階で待つ時間がどれほど恐ろしかったか、長年住み続けた家が一瞬で奪われる痛みはどれほどかと思うと、心が痛くて仕方ありませんでした。ボランティアの日の朝、みことばと祈りの時間に歌った「遠き国や」の歌詞が印象に残っています。「水は溢れ火は燃えて 死は手広げ待つ間にも 慰めもて変わらざる 主の十字架は輝けり」ぐちゃぐちゃになったこの地に、十字架が立っている。全ての回復は十字架のイエスから来る。どうしてですかと訴えたくなる、そこにイエス様が立っているのだと思いました。

#### ◆感想:国際キリスト教学専攻4年 泉ユリエさん

今回、私たち5名はシオン祭の前日に急遽集められたメンバーで、福島県須賀川市に遣わされました。今回は、台風が来て3日後に現地に入り、作業させてもらうことが出来ました。現地に着くと、まだ湿っている黒い泥があちらこちらにあるという状況でした。教会員の方の家の玄関に入ると、家の中は泥と砂利、水没してしまった沢山の家族の品物で溢れていて、衝撃を受けました。本当に捨ててもいいのかとビニール袋に入れながら、何度も聞いてしまいました。しかし、全て「もう使えないから捨てていいの。」という答えしか返ってきませんでした。ご家族から諦めを感じてしまいました。しかし、作業が終わり、教会員の方が祈られた時に、諦めているのではなく神様に委ねているという事、そして私は教会員の方を通して、神様がこの地にいることを感じ、涙が出ました。これからも関わり続けていきたいと思われたボランティアとなりました。

